

## 11月5日 年間第31主日

申 6:2～6    ヘブ 7:23～28    マコ 12:28～34

### 1. 申

vv.4-5 「聞け、イスラエルよ。われらの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」

これは敬虔なユダヤ人たちが朝と晩に唱える“シェマー”の冒頭の言葉です。“シェマー”はユダヤ教の古典的な信仰告白としての役割を、今日に至るまで持ち続けて来ています。それは 申 6:4-9, 11:13-21, 民 15:37-41 の三つを結びつけたものです。

イスラエルの民にとって「われらの神、主」とは、彼らの先祖をエジプトの国での奴隷の状態から導き出して脱出させ、約束の地であるパレスチナを嗣業として与えてくださった神でありました。この神のみが彼らの唯一の主、他のいかなる神々からも区別されてただ一人偉大な神であるという宣言が、この告白の冒頭に置かれています。

### 2. マコ

主イエスは律法学者の質問に答えて、第一の掟はこの“シェマー”の冒頭の言葉であると言われました。そしてこれに結びつけて、第二の掟としてレビ 19:18からの引用を示されました。

主キリストの終末の日の再臨を待望しながらミサをささげている教会にとって、この二つの掟は特別な重要性を持つものとして、共観福音書の中に大切に記録されて、今日まで読まれて来ました。

私たち新しいイスラエルである教会にとって、この「唯一の主」とは御子イエス・キリストの父なる神であります。私たちは十字架のキリスト、祭壇のいけにえのキリストから切り離して、抽象的普遍的に“主なる神”を考えることは出来ません。この世には諸々の神々や諸々の霊が実際に働いているとしても、私たちミサに集まる民にとっては“イエスキリストの父なる神”以外には「主」はいないのです。

そしてこの方は、かつて古きイスラエルをエジプトの国での奴隷の状態から導き出して脱出させ、約束の地であるパレスチナを嗣業として与えてくださった神と同じ方なのです。旧約の救済史は、新約のイエス・キリストにおいて完成します。私たちはその完成の日である神の国の到来の日を待望しながら、ミサをささげているのです。

主日のミサで、私たちは“ともにキリストの御からだと御血にあずかる”(第二奉献文)“隣人”(v.31)として、祭壇を囲みます。「隣人を自分のように愛する」とは、ミサにおいてこそ私たちが先ず第一に体験し味わうべき事柄です。

### 3. ヘブ

2000年11月(主日B年)

祭壇のキリストは「常に生きていて」(v.25)、ミサがささげられる度ごとに天から降って来られます。そしてミサを司る司教や司祭を通して、自ら御自身の御からだと御血を私たち一人一人に与えてくださいます。私たちが受ける御聖体は、死人の中から復活して天に昇られた生けるキリストの御聖体に他なりません。

私たちは、聖体拝領をその一つの中心とし、キリストの福音を聖書から聞くことばの典礼をもう一つの中心として守られるミサを通して、イエス・キリストの父である神を礼拝しているのです。

主日ごとのミサを通して、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして」(マコ12:30) 私たちの神である主を愛する教会は、「神の国から遠くない」(マコ12:34) のです。

アーメン、ハレルヤ。

## 11月12日 年間第32主日

王上 17:10~16    ヘブ 9:24~28    マコ 12:38~44

今年も典礼暦の一年が終わりに近づき、私たちは自分の信仰は“真実な心からの信仰だろうか”ということ、考えさせられるのです。

今朝の第一朗読は、ルカ福音書の中でイエスが、「エリヤの時代に三年六か月の間、雨が降らず、その地方一帯に大飢饉が起こったとき、イスラエルには多くのやもめがいたが、エリヤはその中のだれのもとにも遣わされないで、シドン地方のサレプタのやもめのもとにだけ遣わされた」(4:25-26)と語られた女の話でした。そこには、残された最後の糧を神の人エリヤに捧げた女の信仰が語られていました。彼女は大飢饉によって死を待つ状態の中で、エリヤを遣わされたイスラエルの神に賭けたのでした。信仰とは、このようなものとしてイスラエルに理解され、新約の教会においても受け入れられました。そのような背景のもとで、今朝の福音書は読まれなければなりません。

### 1. マコ

共観福音書において律法学者は、しばしばイエスによって厳しく非難されています。福音書に登場してくる律法学者の姿は、“律法の学者であるけれども信仰の人ではない”というものです。“信仰”と“学問や知識”というものを決して対立するものと考えべきではありませんが、“信仰のない学問や知識”は“学問や知識のない信仰”と同様にいまひとつ“本物”ではあり得ないということです。誤解してならないことは、福音書は律法学者というものは不真面目で不真実だと言っているのではないことです。むしろ真面目で真剣である律法学者たちが、なぜイエスによってこれほどまでに厳しく非難されねばならなかったかに注目したいと思います。

キリスト教のこと、教会のこと、聖書のことなどをよく知っている人に対して、私たちは通常尊敬の念をいただきます。そういう人たちが教会の中のVIP(重要人物)であると、だれでも思います。なぜなら彼らはキリスト教の知識人なのですから、その根底にはイエス・キリストへの信仰があるはずだからです。私たちはそのような人の“根底にあるはずの信仰”に信頼し期待するのです。

しかし、レプタ銅貨二枚を費銭箱に入れた一人の貧しいやもめの信仰を、私たちは理解することが出来るでしょうか。信仰とはこのようなものという理解を、日常の私たちはイエスと共有していると言えるでしょうか。

“信仰”という言葉で人々が考えるものが、20世紀の教会ではかなり大きく変化して、元来教会に使徒継承によって伝えられて来ているものとは異質なものになってしまったと言わなければならないと思います。多くの意見や主張があるのは分りますが、やはりどこかで根本的にズれているのではないのでしょうか。21世紀の教会は、もういちど聖書と教会の各種の伝承に立ち帰らなければなりません。

私たちは今年も典礼暦の一年が終わりに近づいたこの主日に、自分の信仰は“真実な心からの信仰だ

ろうか”ということ、改めて考えさせられるのです。

## 2. ヘブ

私たちの救い主イエス・キリストは、“われら人類のため、またわれらの救いのために”(ニケア・コンスタンチノープル信条)、「世の終わりにただ一度」(v.26) その罪を取り去るいけにえとして御自身を十字架に献げてくださいました。

「人間にはただ一度死ぬことと、その後裁きを受けることが定まっているように」(v.27)、イエス・キリストも「ただ一度」十字架の死によって御自身をいけにえとして献げて(v.26)、「ただ一度(天の)聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです(9:12)。

このキリストは、終わりの日に二度目に天から来て、ミサをささげている主の民を神の国へと迎え入れてくださいます(v.28)。

代々の時代の殉教者たちが、このキリストへの信仰によって支えられて、自らの命を喜びのうちに捨てました。

私たちも近づき来たる終わりの日を思って、祭壇のキリストは私たちがこれに“賭けるに足る”救い主であることを考えましょう。“罪のゆるし、からだの復活、永遠の(神の国の)いのち”への“真実な心からの信仰”を、互いに再確認しましょう。                      アーメン、ハレルヤ。

## 11月19日 年間第33主日

ダニ 12:1～3 ハブ 10:11～14,18 マコ 13:24～32

### 1. マコ

v.26 「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。」

終末の日は、人の子なるイエス・キリストが天から降って来られる日です。この世の歴史には必ず終わりがあるのだということを、すべての教会は典礼暦のこの期節に学ぶのです。

多くの人々が終末やキリストの再臨についての聖書のメッセージを否定したり、理解不能な事柄として無視しようとして来た 20 世紀の教会の中で、典礼暦と主日のための聖書の朗読配分は、終末の日の到来のメッセージを人々に伝える役割を果たし続けて来ました。

第二バチカン公会議後に刷新された新しい典礼暦では、年間の主日の数え方は、王であるキリストの祭日の前の主日が第 33 主日となるように後ろから数えるので、四旬節から復活節にかけて年間が中断されている間に、毎年その幾つかが省略されることとなります。これは典礼暦の終わり頃の主日でどの年にも終末の日の到来についての聖書のメッセージを聞くという、古くからの教会の伝統が受け継がれているからです。

### 2.

v.27 「そのとき、人の子は天使たちを遣わし、地の果てから天の果てまで、彼によって選ばれた人々を四方から呼び集める。」

毎年 11 月 1 日を諸聖人の祭日、2 日を死者の日と定め、一般に 11 月には教会が信仰をもって眠りについた死者たちのことを覚えて祈るのは、このような典礼暦と主日の聖書の朗読配分に関係していると言って良いでしょう。そして教会が毎年 11 月にミサの中で死者たちのことを特に記念して祈ることによって、私たちの終末の希望は再臨のキリストにあることを覚えて来たのです。

このように典礼暦の最後の三つの主日には、私たち一同はこの世の歴史には必ず終末の日が来ることを聖書から聞くのです。その日は、キリストの救いを受けた人々とそうでない人々とが明確に区別される日となるでしょう。

### 3. ダニ

聖書は旧約・新約を貫いて、“死者の復活”の期待を語っています。人はその日「地の塵の中の眠りから目覚め」(v.2) て、神の終末の裁きによって、“永遠の生命に入る者”と“永久の刑罰へと追いやられる者”とに分けられます。

西欧においてもまた日本においても、人の死の理解に関しては、聖書のメッセージよりもむしろ俗信が

人々の心を支配して来ました。キリスト教がヘレニズムの世界に広がって行った初期の頃から、聖書が語っている“死者の復活”に代わって西欧人の考え方を支配するようになったものは、“靈魂の不滅”という思想でした。私たち日本人の殆ども、何の疑問もなく同様の考え方をしているのではないのでしょうか。しかしそれは教会が聖書から聞き、使徒継承によって今日まで受け継いで来た福音のメッセージとは、かなり大きく違っています。

私たちは今年もこの年間第33主日に、聖書が語っている死者の復活と終末の裁きのことを考えましょう。終末の日は確実に近づいて来ていることを覚えて……。

#### 4. ヘブ

イエス・キリストは十字架の死によって、私たちの罪を贖う唯一の完全ないけにえを献げた後、復活して父なる神の右の座に着かれました(v.12)。この十字架のいけにえこそは、すべてのキリスト者たちを終末の裁きの日に永遠の生命に入らせる完全な供え物なのです(v.14)。私たちが神の国に入るために、これ以外には最早どんな追加のいけにえも必要ではありません(v.18)。

信仰とは、このことをひたすらアーメンと“承認し”、このことにひたすら“信賴し”、このことを自らの心と口で“宣言する”ことです。終末の日は、私たちの希望なのです。

アーメン、ハレルヤ。

## 11月26日 王であるキリスト

ダニ 7:13~14 黙 1:5~8 ヨハ 18:33~37

### 1. ヨハ

イエス・キリストは王であります。しかしこの世の国の支配者たちの中の一人、この世を最終的に支配する王という意味ではありません。

v.36 「わたしの国は、この世には属していない。」

ですから、キリスト教会はこの世を神の国に変えることが出来るなどと考えてはなりません。キリストは王ではありますが、決してこの世に理想の世界を建設する“この世の王”ではないからです。

イエス・キリストの国は、終末の日に実現する神の国であります。再臨のイエス・キリストが神の国の王として天から降って来られる日、この世は滅ぼされます。神の国は“この世”が終わった後に、その次に来る全く別な“新しい世”なのです。イエス・キリストの現在の支配は、将来の神の国の王としての支配の先取りであって、それはミサをささげる教会が信仰によってアーメンと承認している王権に他なりません。それは目に見えない支配ですから、教会の外の世界の人々には理解することが出来ない王権です。

福音書のテキストの中で主イエスが、ピラトの再三の「お前は王なのか？」という問いに対して、正面から答えようとしないで、むしろピラトを突き放すように語っておられる理由がここにあります。

### 2. ダニ

主イエスは御自分のことを、特に受難と復活と再臨に関する話の中で、「人の子」と呼ばれました。この呼称はダニ 7:13-14 に由来していると考えられており、今日の主日の朗読配分もそのことを承認しているものと思われます。

福音書の中における「人の子」の呼称は、“主イエス・キリストが王である”ことへの信仰によるアーメン(承認)を、私たちキリスト者に迫るものだと言えるでしょう。年間最後の主日のミサで、私たちも代々の聖徒と共にアーメンと承認を宣言するのです。

### 3. 黙

イエス・キリストが主日のミサをささげている私たちの祭壇に「今おられ」(v.4, v.8) ることを、私たちは信じています。この方がかつて地上に受肉して受難の道を歩まれたことを、やはり私たちは信じています。しかしこの同じ主イエス・キリストが「やがて来られる方」(v.4, v.8) であることを信じることに、20世紀の教会はかなりの躊躇を抱いて来たというのが事実です。

多くの書物、多くの人々が、王であるキリストをこの世に引き降ろし、この世を改善することによって神の国を建設するという見当外れな目標を語って来ました。しかし神の国はこの世の延長ではありません。

それは再臨のキリストによって実現する全く新しい世なのです。

v.7 「見よ、その方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る。ことに、彼を突き刺した者どもは。」

神の国の王であるキリストは、「やがて来られる方」(v.4, v.8) です。神の国は再臨のキリストと共に“来る”のです。その日私たちの“からだの復活”が実現し、私たちは“永遠のいのち”に生きることになります。

新約聖書のギリシア語ではこの“永遠のいのち”と訳されている語はもともと“新しい世の生命”のことです。私たちが通常使用している“信仰宣言”で「罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます」と結ぶ部分を、“ニケア・コンスタンチノーブル信条”では次のように表現していることに注目しましょう。

「罪のゆるしのためなる唯一の洗礼を認め、死者のよみがえりと、来世の生命とを待ち望む。」

「アルファであり、オメガである」(v.8) イエスキリストによって、アーメン、ハレルヤ。